

甲斐弦

高志さんは
帰って来ない



葦書房

今は亡き

堀光之助兄

御霊前に捧げ

甲斐

甲斐 弦 (かい・ゆずる)

明治43年(1910年)熊本県に生れる。東大英文科卒。佐渡中学校教諭、蒙古政府官吏をへて、応召、復員。熊本語学専門学校(後の熊本商大)教授となる。

現在 熊本商大名誉教授

著書 森川譲の筆名で「女兵」「明治十年」、本名で「1930年代の教訓」「オーウェル紀行・イギリス編」「同・スペイン編」など。

現住所 熊本市保田窪本町710-15

高志さんは帰って来ない

昭和六十年十月十日初版印刷
昭和六十年十月十五日初版発行

定価一四〇〇円

著者 甲斐 弦

発行者 久本 三多

発行所 葦書房有限公司

福岡市中央区赤坂一丁目一四番二一

電話 福岡〇九二(七六二)二八九五

振替 福岡一三九四三〇

製本 正光印刷株式会社

©1985 Yuzuru Kai

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

0095-8553-0135

高志さんは帰って来ない

かたはらに秋ぐさの花かたるらく
ほろびしものはなつかしきかな

—— 若山牧水

目

次

第一章	別れ	7
第二章	やがて悲しき	23
第三章	麦の穂は	39
第四章	烈日の下に	61
第五章	追われる人	79
第六章	夜の紫陽花	107

第七章 いまちの月

129

第八章 さざなみ

147

第九章 遠い影

177

第十章 壁の向こうに

207

第十一章 胡桃、そのいのち

231

あとがき

251

第一章 別れ

昨夜久しぶりに高志さんの夢を見た。

今はもう崩されて無くなってしまったあの懐かしい住宅の玄関のたたきに高志さんが立っていた。顔は見えず、僕に見えるのは、古い軍服の上衣と、ズボンと、それからきちんと巻いたゲートル、靴、それだけだったが——そうだ、右手に奉公袋を下げていた——僕にはそれが誰だかすぐに分った。

「帰って来たですな。高志さん。とうとう帰って来たですな」

僕は板の間に膝をついて言った。

「おあがり。さあ、おあがり」

だが高志さんは黙って立っている。低い息づかいが聞える。それも確かに高志さんのものだ。だがいつまでも答えない。僕はだんだん悲しくなって、

「高志さん、高志さん」

と声をあげて泣いた。泣きながら、おれは夢を見ているんだな、と思った。そう思いながら一方では、そんな筈はない。そんなことがあつてたまるか。高志さんは本当に帰つて来たのだ。東満で戦死したなんて、あれは嘘だ。現に遺骨は帰つて来ちゃいない。彼の死を目撃した者だっているわけじゃないんだ、と抗弁していた。

妻に揺り起された。

「どうしたとですか。うなされて」

「スタンドばつてくれ」

と妻に言った。うつぶせになって、顔をそむけて、寝巻の袖でそっと涙をふいた。六十幾つにもなつて、夢を見て泣くなんて。少し恥ずかしかった。明るい光の下で、鼻先の唐紙の印度更紗風の模様や、しみの所々に出来た卵黄色の壁など見ていると、頭が冷たく冴えて来るのが分つた。

「どぎゃん（どんな）夢ば見たつですか」

と妻が訊いた。

「何でもなか」

「高志さんの夢でっしゅ」

僕は黙つて灰皿を引き寄せて、タバコに火をつけた。急に庭で犬が啼き出した。首をそらし

て、腹の底から絞り出しているような、細く、ゆるやかな、波になった物悲しい啼き声だった。

「月があるとかい」

「え？」

「シバが啼きよるね」

「離れたかつでっしゅ（離れたいのしょう）」

妻は寝返りを打って向こうを向いた。僕はタバコの火を灰皿でもみ消してあお向けになった。とても眠れそうにはなかった。

高志さんは僕の甥だった。甥と言っても血はつながっていない。僕の一番上の姉が彼の二度目の母親だ。彼の方が僕より二つ年上である。

高志さんは義理がたい男だった。人に僕を紹介するときはいつもきちんと坐り直して、「僕の叔父です」と言った。だが、二人で話すときは、さすがに叔父さんとは呼ばなかった。酔っぱらって「讓叔父！」と言ったことはあるが、そのほかはいつも「讓さん」。僕の方も「高志さん」と呼んでいた。

高志さんが応召したとき、僕は東京原宿の中央鍊成所にいた。鍊成所など言っても今は知る人も少なからう。中国大陸の各地で働いている青年達を集めて、半年乃至一年の訓練を施して

いた機関である。僕は蒙古政府からの派遣だった。同期生は七十数名だったと記憶している。

鍊成所に入る前の晩、高志さんとは阿佐ヶ谷の家で会った。彼は風邪を引いて少し顔色が悪かったが、昔と変わらず剛健で、明朗で、そして優しかった。

「わあ、来たですな」と彼は玄関の三疊に突っ立って大声で言った。「あんまり遅かけん（遅いから、何か事故だろうかと思うとったですパイ。熊本はどぎゃん（どう）ですか」

「皆元気ですタイ」と僕はゲートルを解きながら言った。「東京にや何も無くて聞いたけん、握飯ばいっばいトランクに詰めて持って来たですタイ」

「そりゃ有難か。さっそく食いまっしゅ。叔母さん、叔母さん」と茶の間に移りながら加津姉を呼んで「何ぼしとんなさるとですか。早うあれば出さんですか。ああたの弟じゃが来たち」「やあ、いらっしやい」と姉は台所から顔をのぞかせて笑いながら「何かな、高志さん、あれで」

「とぼけなはいますな。これですタイ」

高志さんは右手の親指と人差し指をそろえて、唇に二、三度持って行って見せた。

姉が一升瓶を持って来た。三合ほどはいつている。高志さんはそれを電灯にかざして、

「わあ、減つとる。叔母さん、ああた、飲みなはったつだろ」

と頓狂な声を出した。

「飲みゃせんばな」

「いんにゃ、飲みなはった。見なっせ。わしがこの間印つけた所から一寸ばかり下がっとる。こらとても足らんバイ。三合は無か。でけんなあ（困るなあ）！」

「そぎゃん言いなさんな。ほんの一口飲んだだけタイ」

「ほうら、やっぱり飲みなさった」

「配給の酒だけん、あたしの分もそんな中になはいつとるでしようが」

姉は少しむきになっていた。

僕はトランクから握飯を出して高志さんの前に置いた。蒙古の土産を紙に包んだままその脇に並べた。

「讓さん、こら、何な」

「開けてごらん」

高志さんは紙包みを破って、息をのんだ。

「ウイスキー」

ひとこと言って、黙った。真剣な顔つきになった。

「そう、ウイスキー」と僕が言った。「上等じゃなかバツテン、眼のつぶれるようなやつとは違ふ。張家口の中国人が世話してくれた。ああが不自由しとるだろうと思つてな。姉さん、そっちは羊かんです」

「済みません」

と姉が頭を下げた。

「ようし、今夜は豪華版」と高志さんが眼を輝かして「大いに飲もう」

あごの無精ひげを手のひらでこする。昔と変らなかつた。

姉は早く寝かして二人で遅くまで飲んだ。まず日本酒。それからウイスキー。スケソウダラの煮つけを肴にして飲んだ。肴はすぐ無くなったので、僕は持参した握飯を食べながら飲んだ。高志さんはそれを見ると顔をしかめて、ああたはいつまでたつても本当の酒飲みにはなれんね。メシを肴にする奴があるかい。肴が無くなったら、塩気のついた親指をしゃぶりながら軽く一合ぐらい飲むものじゃ。こういう上等のウイスキーを土産に持って来るくらいなら、少しは物の分る男になったのかと喜んでおったのに、ああ、やっぱり元の朴念仁。わしは悲しい、と高志さんは拳で涙をぬぐう真似をした。僕も負けてはいないで、何ば言うかい、高志さん。森川譲は昔の森川譲じゃなか。呉下の阿蒙にあらずという言葉ば知らんとかい。以前この家で一緒に暮したときや、酒も飲まず、女も買わず、タバコも吸わず、品行方正、學術不優等のお坊ちゃんだったが、今は違う。蒙古の奥でもみにもまれて、人間が變つてしもうた。酒も飲む、女も買う、バクチも打つ。もうああたに負けはせん、と啖呵を切った。高志さんは右手をひらひらと泳がせて、ホラを吹くじゃないか、讓叔父。見たところ一向に變らんがね、とせせら笑った。僕は憤然として、あなたの眼は節穴か。ようく僕の眼を見てごらん。この眼の奥に男の悲しみと怒りと、汚濁と純潔の争いが見えぬのか。夜ごと日ごとに相手は替えて、今の

家内をもらうまでに交わりを結んだ女性が二百名。蒙古人、中国人、日本人、ロシア人、ホイホイ。「ホイホイとは誰のことか」と高志さんが訊いた。ホイホイを知らぬのか。回教徒のことだ。内蒙には沢山いる。最初僕が行った包頭では、街を歩くといつも彼女らにぶつかった。中近東の回教の女達はヴェールをかけて男には顔を見せぬと聞いたが、包頭ではそんなことはなかった。僕が洋車に揺られて街を行くと、白鳳天平の昔の仏像に似た顔立ちをした女達が、纏足ではない、活潑な足取りで砂の道を歩いて来るのだ。僕の車を避けて顔をしかめ、三分の敵意と七分の好奇心でもって車上の僕をにらむのだ。頬が豊かで、唇がザクロのように赤くて、ああ、法隆寺の仏様のようになまめかしく美しい女達だったなあ。クロードルのセイロンの詩をいつも思い出したよ。われ病を得て涙ぐましくかごに揺られ行くと、従者が膝に投げてくれた何とかの花よ。高志さんはその詩を聞くと飲むのをやめ、あごを左手に乗せて、そういう歌は久しく聞かなかったなあ、とつぶやいた。朝から晩まで、撃ちてしまわむ、鬼畜米英、勝って来るぞと勇ましく。よし、おれも歌おう。おれは独文だからカール・ブッセだと、さびのある声で、山のあなたの空遠くさいわい住むと人の言う、と懐かしい歌を我流で歌い出した。座敷の暗がりから姉の声がして、もう大概で寝らんかい。高志さんもあすは早出だろう。譲さんも鍊成所に行かなんでしょうが、と心配そうに訊いた。高志さんは歌をやめて、叔母さん、心配はいらん。ああたはゆっくりおやすみ。わしたちゃ朝まで飲むとだけん。こぎゃん機会はまたとなか。今日ありて明日なき命。大君のためには何か惜しからむ、薩摩の瀬戸に

身は沈むとも、と一氣に吟じて、とろんとした眼で僕を見て、ところでこれは誰の歌じゃったかい。僕もとっさには思い出せず、高杉晋作、いや、平野国臣だったかな。「馬鹿野郎！」と突然高志さんが怒鳴った。だから叔父貴は駄目なんだ。東大英文科が何だ。おれは早稲田の独文だが、忠勇義烈の精神においては叔父貴に勝ること数等じゃ。こら、讓叔父。よく覚えとけ。これは月照と共に海に投じた、我らが崇拜おくあたわざる、崇拜おくあたわざる、と繰り返して、高志さんは頭を抱えた。分った、と僕は膝をたたいて、西郷隆盛だ、南洲先生だ。

「そうだ」と高志さんは体を起して、よくこそ言つて下さった。西郷隆盛先生だ。西郷さんの精神こそ今日の我々が拳々服膺すべきものだ。朝には恩遇を蒙り夕には坑にやる。人生の浮沈晦明に似たり。頑張つて行こう、と高志さんは僕の手を固く攔んで、なあ、讓叔父。この分で行きや戦争はどうなるか分らんバイ。科学協會に席をおいとるわしには時々秘密の情報が流れて来る。大きな声じゃ言われんが、ミッドウェイはひどかったそうだ。海軍さんたちが困った、困ったと頭を抱えるので、突つこんで訊きたしたら、実は、と本当の損害を打ち明けてくれた、と上司がこの間話していた。そろそろ英語の勉強でもしておく方が利口かも知れん、とひそひそ話しとる同僚もいる。だが、わしら熊本人には、わしら清々校の教育を受けた者には、そういう器用な真似は出来ん。わしはこの戦争の本質がどんなものであろうとも、今となつては何も言わず、力いっぱい戦つて死ぬつもりじゃ。わしは体をこわしておったので兵隊は丙種合格じゃったが、今は元気だ。丙種でも赤紙（召集令状）は来る。赤紙が来たら勇躍